

NIE 記者派遣事業感想文

○蒼開中学校 3 年生

新聞記者の方の実体験を聞くことが出来てとても良い体験になりました。

加藤さんの震災で体験した複雑な思いや取材で知り合った人との暖かい長い付き合いのお話を聞いて感動しました。災害などの緊急の時こそ急いで出勤していち早く人々に情報を伝えないといけないので素晴らしい仕事をされているなと思いました。

今までは、新聞を見る度に、「記者の方はどういう思いでこんな悲しい記事をかいているんだろう？」と疑問があったのですが、今日のお話でその謎が解けました。奥歯に挟まっていたものが取れたような気分でスッキリしました。これからも新聞を取り続けようと思いますし、デジタル化が進んでいるけど、もっと新聞の良さに気づく若者が増えてほしいなと思いました。

今日の新聞記者の方の講義を聞いて、被災地まで行って自分の地元が酷いことになっていて辛いにも関わらず、しっかり取材や亡くなった子どもたちの写真を集めに行ったりと凄いなとおもいました。他にも、自分の睡眠時間を削ってまで取材に取り組んだり、張り込みをしたり自分が想像していたものより大変な仕事で驚きました。新聞記者は精神面で辛くなりそうなイメージがあるので、実際どうなのか疑問に思いました。今日の NIE で私の知らない新聞記者の方の仕事を聞くことができて興味深かったです。

カメラが重そうだった。あと西口が面白かったです

読売でも神戸でも仕事内容はさほど変わらないことが分かりました。

新聞を読む人ではなく、制作する人の視点のお話が聞けて良かったです。記者さんは、悲しい事件の取材では被害者の気持ちを考えると、取材はとてもしにくいと言っていました。しかし、それ以上に新聞で証を残してあげたいという気持ちがあるから取材をするのだと言っていました。私はこの言葉を聞いて、新聞記者をする事の意義のようなものを感じました。最近はデジタル化が進んで、新聞取る人は減ってきているかもしれませんが、テレビのニュースとは違い、新聞は記録として残るので、これからも新聞の需要はあると思いました。

新聞記者さんが持っていたカメラが重そうだった。

前日も新聞社の方が来てくださりましたが、その時とはまた別のことを知れて、すごく勉強になりました。私は新聞記者の人のあまりプラスのイメージを抱いておらず、寝る暇も惜しんで働いている感じがあったので、だいぶイメージが変わりました。あと、転勤の回数がすごく多くて驚きました。

私は、新聞記者の方の話を聞いて、最も驚いたのは、阪神淡路大震災の時に、神戸での滞在中、自転車で取材をしたということです。当時はタクシーで 100m進むのに 1 時間かかったという話を聞いてすごく大変だったことが分かりました。また、大変な取材があっても、やめないというところに、きっと仕事にやりがいを感じているのだろうなと思いました。

今回新聞記者の人の話を聞いて、記者という仕事の印象が変わりました。私は、ずっと記者は何か事が起きればすぐ現場へ行き、話を聞く。そのおかげで私たちが毎日の出来事を知れているんだと分かっている、世の中には世界に知られたくない人もいるのに家まで行ったりして「どうしてそこまでするのか。もういいじゃないか。」なんて思っていました。でも、今回話を聞いて記者さんは「この仕事に就いたことを後悔し

ていない」といっていました。とても輝いているように見え、記者という仕事の凄さをしりました。色々なことを知れるいい機会になりました。

体調不良のため、講義の全てを聞くことができませんでした。生半可な気持ちでできる仕事でなく、根気のいる仕事だと思いました。不安定なスケジュールやたくさんの転勤は、私ならすぐに疲れ果ててしまうでしょう。このような大変なことも多い仕事を続けている新聞記者の方の「記事への愛」も同時に感じました。私も自分の仕事に誇りを持てるような職業に就きたいです。

新聞記者さんの仕事は、すごく大変なんだなと感じました。

何十回も転勤してきている事に驚いたし大変だなと思いました。

話を聞いたけど新聞記者になりたいとは思わなかった。

震災の話は感動しました

今回、新聞記者の方の講義を聞く前は、あまり大変そうなイメージが少なかったです。でも話を聞いているうちに、災害や被災地に行って被害にあった方のお話を聞いたり、つらいことなどを聞くことが大変だと思いました。しかも夜はあまりねれなかったりとか、肉体的にもしんどいことを知りました。でもこの新聞記者という仕事が、新聞を読む人たちに今の状況や被災地の方の声や生活などに影響を与えたり、歴史に残したりするもので大事な仕事だと改めて実感できました。

新聞記者さんが持っているカメラが大きくて驚きました。

○蒼開高校 1 年 3S 組

今回の NIE の授業で改めて新聞記者の大変さについて感じた。災害の被害者に取材をすることは自分が被害者の気持ちになると、取材どころではないと思ってしまったと思った。でもそれを引き出すことができるトークスキルや諦めない根性が必要だと感じた。デジタル化がされて行く今の世の中で新聞がどうあるべきで、どう変わって行くのか、紙媒体であること残していくのかを感じた。

昨日の加藤律郎記者のお話を聞いて、新聞記者のイメージが少し変わりました。以前までは、新聞記者はただ大変なだけの忙しい仕事というイメージでしたが、実際は楽しい事もたくさんあるということを知りました。また、新聞記者は 1 人で記事作成から色んなことまですることも知りました。また、1 番前の席だったので、実際撮影するカメラを持たせて貰ったのですが想像以上に重かったです。あれを何となく持てるのも凄いなと思いました。

いい話が聞けて良かったです。

僕はこのあいだの加藤律郎記者の話を聞き印象に残ったことがいくつかあります。1 つめは記者の仕事に関してのことです。寝る時間が全然なかったりいろいろな場所で寝たり想像以上にきつそうな仕事のようなので記者の人は大変だなと思いました。それと同時に僕は早起きがとても苦手なので向いてないなと感じました。

2 つめはいろいろな場所に引っ越ししたりすることです。僕は記者の人はある程度は引っ越ししたりするだろうとは思っていましたが、思っていた以上に引っ越しの数が多く驚きました。

読売新聞洲本支局の加藤記者の話を聞いて、新聞記者は大変何だなと思いました。

まず最後まで話を聞いて思ったことは、新聞記者はすごく大変なんだと感じました。災害が起きるとその場所に行き、亡くなった人たちの写真をもらうと言うのは記者の立場からするとすごく辛いと思う。でも、亡くなった方の親族からすると今来るな などすごく嫌な気持ちになると思いました。どんな所でも寝ると言っていてほんとにすごい仕事なんだと思いました。

新聞記者の話を聞いて、知らないことがたくさんあって驚きました。新聞記者の仕事は情報を収集、取材をしたりして記事に書くそうです。取材をする人はその人の所に泊まり込みをするって聞いてとても驚きました。その瞬間僕にはあまり向いてない仕事なのかなあと思いました。記者の人が最後に今まで取材してきた中で一番印象に残ったのは、阪神淡路大震災つとっていました。悲しんでいる人に取材をつらいつと行ってた所がとても印象に残りました。この講義で新聞記者の仕事などが知れて良かったです。

加藤律郎さんの貴重なお話を聞けてとてもよかったです。震災の際に亡くなった子供達の写真を遺族の方々からいただくという仕事について僕は最初「そんなことをしてくれる人なんていないだろう...」と思っていました。しかし、加藤さんの子供達が十数年しか生きられなかったぶん生きた証をここに残しておきたいという思いから、それだったらいいかないかと思いました。その後僕は二回当てられて緊張しました。

僕は、新聞記者の仕事が、改めてしんどいものだと思います。例えば(夜討ち朝駆け)夜遅くまで張り込んで収穫がない場合朝早くから張り込むことそれを聞くと僕はとてもきついものだと思いますが、かなりやりがいのある仕事だなとも同時に思いました。理由は、被災した場所に直接向かって被災者の生の声をそのまま聞けるからです。被災現場を直接みるのは辛いかもしれないが被災者からしたら新聞は必需品だと僕は思います。

NIE の記者派遣事業の授業を受けて僕は、新聞記者はとても大変な仕事なんだなあーと思いました。夜に叩き起されるって言われていたのでしんどそうだなと思いました。新聞の記事を作るのはとても大変そうだけどすごいと感じた。僕は加藤律郎記者の話を聞いたけど、大変そうって言うのが勝って新聞記者になりたいとはおもいませんでした。でも、新聞記者が居ないと新聞が読めないって事を考えるととてもすごいと思いました。

NIE の記者の話を聞いて印象に残っていることがあります。一番印象に残っていることは普段何気なく見ている新聞の写真がとても危険なところで撮られていたことです。水害のときなど自ら隊員のすぐそばに居たりしたことにはとても感動しました。記者と言えば公に出ている人などについてよく記事を書いているイメージだったので印象が変わりました。

とても勉強になりました。ありがとうございました。夜討朝駆けの話などはとても新聞の裏側だと思いました。紙面を見ただけではそんなことは、わからないので、去年聞いたお話もあまりしっかりと覚えてなかったので覚えなおすことができてよかったです。他のお話の方も聞いていて記者は、ものすごく根性のいる仕事だと思いました。これからは、もっと新聞を細かく毎日読もうと思います。

加藤さんの阪神淡路大震災などの色々な震災の取材の実体験を話を聞いて、新聞記者がどれだけ大変なのかがわかりました。
他の新聞社が先に有力な情報が書かれている記事を作ったら、自分たちもそれに続いて書かなくてはならないという話がとても興味深かったです。

加藤記者のお話を聞いて、新しいことをたくさん知りました。加藤記者が1番思い入れがある阪神・淡路大震災の取材を聞き、新聞記者の人は、大変なお仕事だけど、やりがいがあるんだなと思いました。亡くなった方のご遺族の人に話を聞くことは、心が痛く、辛かったのだと思いました。もし私が新聞記者をしていたら、自分から手を挙げてご遺族の元へ足を運ぼうとしないと思います。でも、日本の中で起こっている出来事に1番速く、近く赴ける仕事は、素晴らしいことだと思います。

今日のお話を聞いて、心に残ったことが2つあります。1つ目は、世の中の出来事を記事にするときの表現の仕方です。5W 1H はもちろん、比喻などを使って、読者を惹き付けているところに新聞記者の方々の努力を感じました。2つ目は、新聞記者の人たちは命がけで仕事をしていることです。「伝えたい」という熱い気持ちを感じました。今後は、今日学んだことを意識して新聞を読みたいと思います。

加藤さんのお話を聞いて、新聞をつくるのは大変な労力や長い時間が必要なんだなと思いました。水仙の写真を見て自分で題名を作るとき、私は「黄色の絨毯」という、ありきたりな題名しか思いつけなかったけど、新聞記者さんの題名はユーモアや面白みがあり、思わず読んでみたいと思える題名でした。題名に様々な工夫を施して、読者に短い言葉で面白そうと興味を持ってもらえるような技術が必要なんだなと思いました。毎日新聞が読めるということはあるがたいことなんだなと思いました。

加藤さんのお話で特に印象に残ったのは阪神・淡路大震災の時のお話です。現地に取材しに行った時、変わり果てた街の光景を見て涙が零れたと言っていて、私はまだ生まれていなかったけど、その時加藤さんが目にした光景が浮かんでくるようで心が痛くなりました。その時は新聞記者は辛い仕事だと思ったけど、加藤さんが被災地取材を通して出会った人との交流について聞くうちに、新聞記者は辛い仕事でもあるけど、新聞を通して人の人生に寄り添える素晴らしい仕事だなと思いました。

私は NLE の記者の方の話を聴きとても興味深いと思ったことがいくつかあります。まず一つ目は新聞記者の仕事についてです。NLE の方の話を聴いていると新聞記者の仕事内容が知らないものがありとても面白かったです。また、この機会に新聞記者の仕事について興味を持ちました。2つ目は、新聞記事の題名についてです。人を惹きつける題名を考えることは自分が思った以上に難しく、これを色んな記事ごとに考える新聞記者の方はすごいな、尊敬するなと思いました。

NIE の加藤律郎さんのお話を聞いて、震災の時の詳しい状況や、その中での新聞記者の働きの重要性が分かりました。被災者、遺族の人たちを少しでも励ますために努力を惜しまない姿勢に感動しました。新聞記者は私たちの見えないところで社会を支えているのだということを改めて実感できました。新聞はひとつ

ひとつの記事に新聞記者の熱意が込められているということも分かりました。普段、私はあまり新聞には目を通しませんが、このお話を聞いて、その熱意のこもった新聞を読んでもみようと言う気が起きました。

加藤さんのお話を聞いて、新聞記者は大変な仕事だと改めて分かりました。印象に残ったのは、震災などが起きたところに新聞記者の人も現地に取材をしに行くところが命がけで取材をしていると分かりました。亡くなった子どもたちの写真を集めるのも簡単じゃなくて、何度も遺族のところに行ったりして沢山の努力があつて新聞は作られているんだなと思いました。他にも、テレビのニュースは一度放送すれば終わりだけど新聞はずっと残り続けるというところにも心にすごく刺さりました。

私は前から疑問に思っていたことがあります。それは、新聞社によって「自民党の支持率」「野党の意見」「国民の意見」「スポーツ記事」が異なっていることです。例えば、私の家では朝日新聞をとっていますが、そこには「自民党の支持率が 50 以下だったのが読売新聞だと 50 以上」でした。これは、読売新聞が自民党支持者が多いということを示しているのではないのかと思います。そして、「国民の意見」では、朝日新聞だと社説という 1 面があります。そこでは、「アベノミクス」についてや、「安部語」についての記事が掲載されていました。私は思わず「安部語」の記事を読んで笑ってしまいました！しかし、読売新聞だと、「経済欄」があまりにも少ないような気がしました。

「スポーツ記事」も朝日新聞だと、阪神のことについて掲載していますが、読売新聞だと巨人のことについて具体的に話しています。そう考えると、朝日新聞は関西人が読む傾向がある。読売新聞は関東人(都心)で読まれる傾向があると思いました。なので、どこの新聞社の新聞を読むかによって政治絵の興味、スポーツファンが異なると思います。つまり、どこの新聞社の新聞をよることは、重要だと思います。

新聞を読む側ではなく作る側のお話を聞くことができ、面白かったです。震災や事故、災害の現場に行つて取材するのは、体力的にも精神的にも大変そうだなと思いました。毎日何気なく新聞を読んでいるけれど、そんなに苦労して作られているのだということを改めて感じさせるお話でした。配られた読売新聞は家で取っている新聞と違った雰囲気面白かったです。もっとすみずみまで新聞を読みたいと思いました。

新聞記者のリアルな仕事内容を知れました。特に、震災の取材の話が印象に残っています。新聞記者の仕事は大変だというイメージしかなかったのですが、取材の中で生まれる親交もあるというところに、記者のやりがいを感じました。また、新聞の見出しを考えることは難しかったです。見出しには記者の工夫があるのだと感じました。新聞は一面とテレビ欄以外あまり見ていなかったのですが、これからは、他の記事にも目を通してみたいです。

今回、NIE の加藤さんのお話を聞いて私はある言葉を思い出しました。小説『王とサーカス』には、「速さがない分だけ、調べて作り込んだ記事を書く。」「飛行機が一番速いけど、バスもリクシャもいないということではない。」という会話があります。情報を届けるということは変わらないけれど、場合によって何が秀でるのは違ってくるということを改めて感じました。そして新聞は、約半日で情報を集め記事を書くことでできていることを加藤さんのお話を聞いて実感しました。

新聞記者のイメージは自分自身の時間が取れなくて不規則な生活になっていたり、取材や情報収集をしたり、新聞紙を作るのに時間がとてもかかり、大変なイメージを持っていたけど、やりがいがあり、責任感がある仕事だと思いました。普段新聞は読まないけれど、毎日新しい情報を全国に届けてくれることに感謝しないといけないと思いました。新聞記者は取材をする仕事だけど、拒否されることがあるのだと初めて知りました。新聞記者の仕事の大変さや苦勞が本当にわかりました。

新聞記者さんの話を今まであまり聞いたことがなかったので、貴重な経験ができてよかったです。記者さんが、転勤が多いということは、初めて知りました。おんなじ地域にずっといたほうが、その地域のことをより知ることができ、また地域の方と見いい関係を築く事ができるので不思議に思いました。でも、色んな所を見て、いろんな文化を知って、たくさんの新しい経験ができるということは、魅力的だと思います。経験談のところで、警察官の家の前に張り込んで、捜査状況をおしえてもらおうと言っていたのですが、それは迷惑になると思います。事件の捜査状況は、気になるので記事としては面白いと思うのですが、くたくたで帰ってきた警察官に質問攻めは、どうかなと思います。新聞記者は、とても大変な仕事だと思いました。でも、とてもやりがいのある仕事だということもわかりました。

加藤さんの話を聞いて新聞記者はどういう仕事をしているのか、よく分かりました。取材したり、関係者にインタビューして情報を集めたり、執筆したり、とてもハードな仕事だと思いました。また、新聞には絶対に間違ったことを書いてはいけないので責任重大だと思いました。新聞記者の仕事は記事を書くことしか知らなかったけど、いろいろすることがあって、忍耐力と強い責任感が必要だということが分かりました。

新聞記者の人達がどんなことを考えながら取材しているのかや仕事の実態など、初めて知ったことや、考えもしなかったことなど、たくさんのことを知ることが出来ました。阪神・淡路大震災の取材の際に、子供達が生きた証を残してあげたい、みんなに今何が起きているのか知って欲しいと考えていたと聞き、もっと荒んでいるのかなと思っていただけ、すごく優しい人達なんだと思い、新聞記者に対するイメージが変わりました。